いきいきまえばし人

前橋カメラ部部長
佐藤 浩多さん・43歳
元総社町一丁目

楽しく写真を撮れるように

自分の好きなことを部活として立ち上げる仕組み、前橋〇〇部の一つ前橋カメラ部の部長を務める。

「4年ほど前に〇〇部の仲間から頼まれて始めました。長くやるつもりはなかったのですが、やめないでと言われたのもあって続けています。もう自分だけのものではなくなってきていますね」

ホームページの制作会社を経営していて、仕事上の必要性から写真撮影も行うようになった。今ではプロカメラマンの肩書きも持つ。

「星空や花など写真の楽しみ方は人それぞれ。撮り方も違う。だから面白いんです」

カメラ部の部員は累計約400人。参加のハードルが低いので新部員がよく加わる。そこで、4回に1回ほど初心者向けの講習を行っている。

「写真は後で見た時に懐かしさを感じられるのが魅力の一つ。楽しく撮れるようになってもらえればと思っています。そして、部員が撮った写真をさまざまなところで見てもらい、前橋に来てくれる人が増えるといいですね」

カメラ部は9月8日と9日に三河町一丁目の芸術文化れんが蔵で写真展を行う。今回のテーマは日本。前橋というフィルターをとおした日本は、どう写っているのだろうか。

萩原朔美 河畔奇譚

vol.9
圓前橋文学館
☎ 027-235-8011

萩原朔美文学館長が各界の著名人と対談。さまざまな領域で活躍する館長の素顔に迫ります。今回は天井桟敷のメンバーだった映像作家の安藤紘平さんとの対談「我らの寺山修司体験」（一部）の前編をお届けします。

●映像作家になるきっかけ

安藤　寺山さんがフランスで映画を撮ろうと言い出したんだけど、現地クルーの依頼料はとても高くて寺山さんの奥さんの九條さんと僕は頭を悩ませていたの。すると、寺山さんが「安藤さん、これからは映画の時代です。一緒に映画作りましょう」って言ってきて、中古のカメラを買うことになった。これで誰が撮るんですかと聞くと、お前だよって言われて。僕はカメラを触るのも初めてなのに。

萩原　それはなかなか無茶を言うね（笑）。

思い出話に花を咲かせる安藤さんと萩原館長

安藤　買うんだから店に教わればいいって、結局教わって撮ったよ。それからも、カメラはあるのに寺山さんはなかなか撮らないから、萩原さんと僕と何人かでフィルム映画会社を作ったよね。それだけではお金が入らないからもう1つ会社を立ち上げて、そこで萩原さんが編集長の雑誌「ビックリハウス」を作った。

萩原　考えてみたら我々が映像作家になったのは、寺山さんが撮れと言ったからで、あれがなかったらなってないね。寺山さんは人を焚きつけるのがうまいから。それで周りはみんな迷惑するんだけど、みんなの人生を変えているね。

（11月1日号へ続く）

クローズアップ CLOSE UP

花火の光が照らす表情

8月11日に前橋花火大会を開催。1万5,000発の大輪が夜空を彩りました。第3回Web花火大会で優勝した共愛学園前橋国際大小柏ゼミの作品「Seasons」や、22年ぶりに再開した尺玉の打ち上げもあり、訪れた人はその迫力に拍手喝采を送っていました。

トップ目指し高く跳ぶ

8月4日と5日、ヤマト市民体育館前橋で2018FIGトランポリンワールドカップ前橋大会が開催されました。選び抜かれた選手が各国から参加。スタンド席を越える高い跳躍と華麗な技で観客を魅了しました。なお、当日は多くのボランティアが大会運営を支えました。

前橋の先進事例を視察

8月10日、野田聖子総務大臣が来訪し本市のICT（情報通信技術）の取り組みを視察。自動運転や救急車でのマイナンバーカードの活用事例などを見学しました。山本市長や関係者との意見交換会では、地方の課題解決に向けたICTの活用について話し合いました。